

AA 出版物からの贈り物……読んでよかったこの1冊

『アルコールクス・アノニマス 回復の物語vol.7』を読んで



おおつ今日一日グループ

Nishi

アルコールクス・アノニマス 回復の物語 vol. 7 が2023年6月20日に発行されました。本書はAAの基本テキスト「アルコールクス・アノニマス」英語版第4班の後半に収録された回復の物語で、42人のアルコールクが、アルコール症(アルコール依存症)からどのように回復したかを語った42編のうち、最後の未訳5編の日本語訳したもので、三部構成となっています。

第一部 『AAのパイオニア(先駆者)たち』に登場するのはAAの初期にグループにつながった人たちであり、「与えられた鍵」の筆者も1939年春に発売された『アルコールクス・アノニマス』という本に出会ったことがきっかけとなり、飲まない生き方をまっとうして人生の終焉を迎えました。

第二部 『時間があるうちに酒をやめた人たち』に登場するのは、アルコール症がそれほど進行していない段階でAAに繋がった人たちです。最近では飲酒が原因でちょっとした失敗をしたことが時々ある程度の人でも少なくありません。そういった人たちがなぜAAに加わってくるのでしょうか。

第三部 『ほとんどすべてを失った人たち』ここに登場するのは悲惨な、最悪の状態になったアルコールクです。当時はみな破滅の方向へまっしぐらに向かっていることに気づいていましたが、それを止める手立ては何もないように思えたのでした。何年も飲まないで生きてきたいま、彼らは自分がどのように回復したのかを語っています。

本書の著者たちはみなアルコールで自分の人生が手に負えなくなり、AAとAAのプログラムに出会い、回復に至りました。とはいえ、全員がはじめからAAとAAのプログラムを信じ、熱心に取り組んだわけではありませんでした。

かくいう私もはじめは、AAやAAのプログラムどころではありませんでした。後から仲間が教えて

くれたのですが、私が初めてミーティングに参加した日は、よれよれの服とぼさぼさの頭で、自分がいかに優秀であるかを語っていたそうです。別の日のミーティングでは、やっぱりぼさぼさの頭にぶしょう髭で自分なりの偉業を語っていたそうです。それを言うなら、せめて身なりくらいきっちりしろよと自分でも突っ込みたくなるような、恥ずかしい当時のことを仲間が教えてくれるものですから、私の人生でアルコールが必要になった生きづらさ、立派でいなければいけないというプライドと私にあった緊張も次第に取れ、本来の姿に戻って行きました。そんな相互作用を起こしてくれるユニークな仲間とユニークな関係、そしてAAとAAのプログラムのもと、私も飲まないで現在6年間生き続けられています。

一方で、飲んでいたころの私も本書の著者たちと大きくは変わりません。一口のお酒とはコップ一杯のことで、一気に飲み干し次の一杯に手を付ける。ドクターストップどころかスナックのママにストップをかけられる有り様で、アルコールにも自分にも酔っていました。自分の人生が手に負えなくなっていたことはわかっていたましたが認めたくありませんでした。ただ、ずっと酔っていたいと思っていました。でも、飲んでいるうちは何も変わりませんでした。アルコールに頼ることで自分の人生が手に負えなくなっていたのです。

最後に、「まえがき」に添えられた文をもって本書の紹介文を終わらせていただきます。

この冊子がAA内外の多くの人々に、とりわけ、いま苦しんでいるアルコールクに読まれ、そして、「そうだ自分とまったく同じだ。なんとか自分も回復したい」(ビッグブック43ページ)という共感の輪と回復の連鎖がアルコールクの愛で広がっていくことを願っています。

AA出版物からの贈り物……読んでよかったこの1冊

『回復の物語・第7集』を読んで

飲酒をやめる物語集は「謙虚で美しい生き方を見つける場所」

オネスティ唐崎グループ
堅田シニアミーティング

とら



B6・89頁・300円

英文ビッグブックのパーソナル・ストーリーの翻訳第7集です。第1～7集で、翻訳出版は完了です。

経験集は「生き方を見つける場所」

第7集では、①シカゴのAA草創に関わった女性、②ユダヤ人でエリート社員の男性、③若い女性弁護士、④仕事中にも大量飲酒した建築業の男性、⑤幼少から父親の通うAAミーティングですごしてきた女性の5人の人生が語られています（5人中、3人が女性です）。

人生、つまり、人の生き方は千差万別ですから、飲酒に関係する部分、「なぜ、どのように、飲酒してきたのか・どうしてやめようと思ったのか・飲酒をやめてどのように生きているのか」という流れは共通していますが、状況や経歴、内容はそれぞれに個性的でまったく異なっています。

それぞれの回復の物語を読むと、アルコールに依存してきた人間が酒をやめて生きるには、心の底から「栄誉や金銭、指導的地位や賞賛とは対極ともいえる、謙虚と平安を願う心境」に至らないと実現しないことがよく分かります。

ですから、酒をやめるとは、「生きることへの新たな自覚への道のり」だと思われ、酒をやめて生きる人の物語は、「謙虚に美しく生きる生き方を見つける経験集積の場所」と感じられます。

たとえば、女性弁護士の物語・・・

個人的には、私は法律事務所勤務が長く、飲酒で命を落とした弁護士を数人知っているの、「困難なことに挑戦」して弁護士になった女性の物語、「果てしない探求」に興味を湧きました。

彼女の働く法律事務所には5人の弁護士がいますが、10年余で、彼女の夫を含めて3人の弁護士が飲酒で早世し、酒を飲まない男性弁護士と、彼女が生き残ります。彼女が生き残ったのは、若くしてAAメンバーとなったからです。しかも、彼女は、AAはつまらないと思いながらもAAに

「どっぴりとはまって」いき、飲まない日々を重ね、活動的なAAメンバーとなります。やがて、「心を開くだけでスピリチュアリティが私の中へ流れ込んでくる」経験をし、真に他の人を助ける生き方を見つけていくのでした。

すべてを失っても、飲まない人生は始められる

飲酒でほとんどすべてを失った男性の「人生の立て直し」の物語は、痛切です。建設業で生計を立て、6人の子どもに恵まれますが、仕事を失い、家庭は崩壊。別居した妻の生活保護受給をいいことに、仕送りもやめ、飲酒で身も心も荒廃し、本物のアルコール・リクになります。酒で死にかけますが、治療施設に入所し、AAにつながって飲まないで働き、やがて妻や子と共に生活できるようになります。しかし、飲まない日々子どもを失うなどの惨禍に襲われた彼は、「苦しみを和らげるためにたくさんのミーティングに行き」、飲まないで生き続けます。この物語から、どのような状況・状態であっても、飲まない新しい人生は始めることができるし、続けられると教わります。

飲まない人生は、新しい人生・・・

シカゴのAA草創に加わった物語「与えられた鍵」は、「回復が手に入るのなら地の果てまでも行く」という彼女から「AAは卒業もゴールもない無限のプログラム」だと教えられます。ユダヤ人紳士の「私も同じ」からは、AAにつながった後の再発でアルコール・リズムを深く認めていく過程から、スピリチュアルな目覚めの実情が分かります。AAで育った女性の「空っぽの心」では、飲酒による結婚生活の破綻や会社の滅亡で飲酒の問題が表面化し、ビッグブックに救われてAAに加わり、AAでの愛と信仰が大事だと気づいていく姿が鮮烈です。——こうして、私たちは、諸経験から、生きていく上で必要な多くを学ぶことができます。無上の喜びと言えましょう。